ジャンルを超えた新視角のコレクション

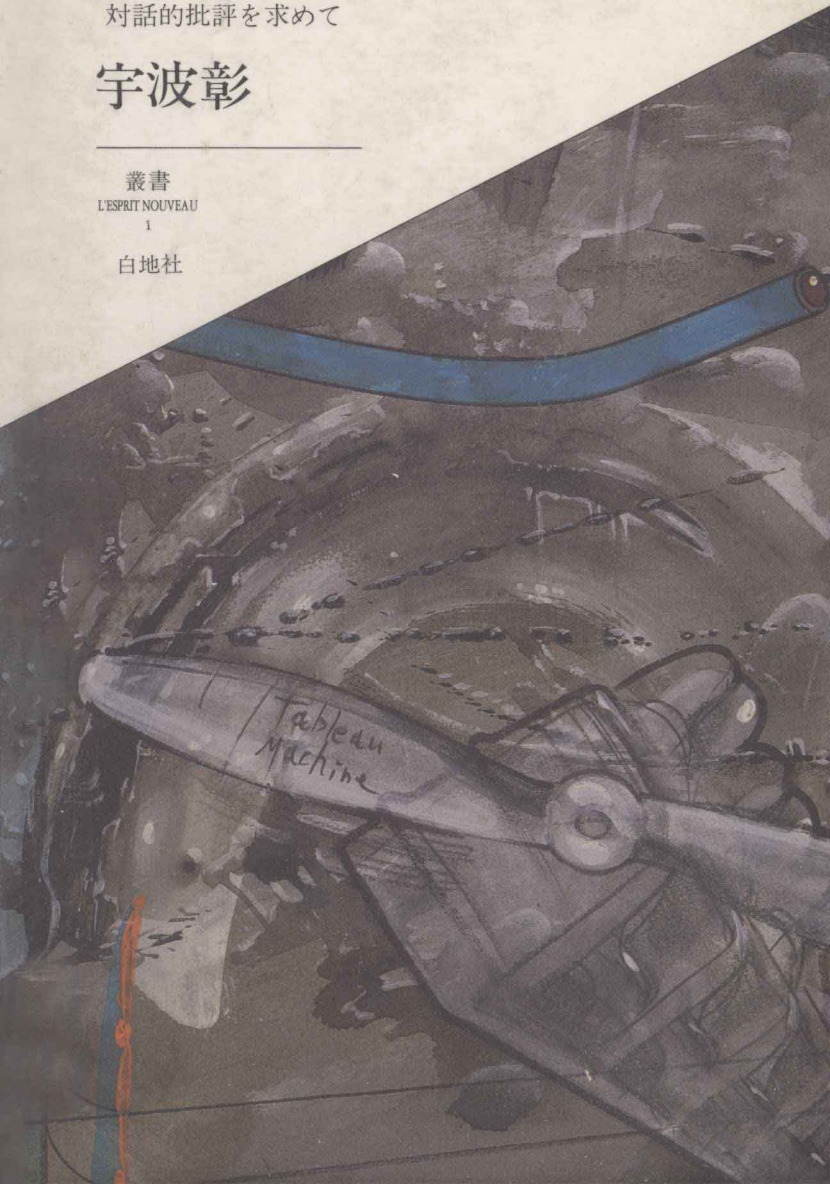
反市民の文学

対話的批評を求めて

宇波彰

叢書
L'ESPRIT NOUVEAU
1

白地社



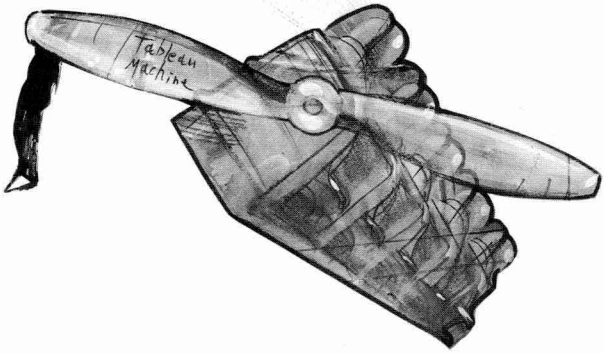
反市民の文学

対話的批評を求めて

宇波彰

叢書
L'ESPRIT NOUVEAU
1

白地社



著者

宇波彰（うなみ・あきら）1933年静岡県浜松市生まれ。東京大学大学院修士課程終了（哲学専攻）。現在、明治学院大学文学部教授。文学をはじめ、あらゆる領域にわたる評論家として活躍中。主な著書に『引用の想像力』『誘惑するオブジェ』『批評のパトロジー』などがある。

叢書
L'ESPRIT NOUVEAU
1

宇波彰
反市民の文学
1991年10月20日 初版第1刷発行

定価 2000円（税込）
発行者 土岡忍
発行所 白地社
京都市左京区二条通り川端東入る南35 二条ビル3F 〒606
電話075-751-7879 振替京都2-34367
編集 加藤明子
印刷所 創栄図書印刷株式会社
製本所 株式会社修明社製本所

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©1991 ISBN 4-89359-086-3

目次

反市民の文学

口絵 中村 宏

第一章 反市民の文学
オイディプス的状況の排除 8
独身者の文学 19

第二章 「不連続殺人事件」論
探偵小説の典型 28

第三章 ファルスの文学
《考える人》の文学 40
私小説的発想の拒絶 50
知的想像力のあり方 60

第四章 巨大なトートロジー
同一のものの再発見 68
想起と直観 85
真の他者の不在 89

第五章 大衆性と現代性の共存
物としての人間 96
坂口安吾の子・筒井康隆 109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

第六章　パロディとしての「万延元年のラグビー」　筒井康隆的パロディ　118
第七章　吉行淳之介の文体　作品としてのパフォーマンス　文体というパフォーマンス　130　140
第八章　ポストモダン再考　ポストモダン的状況　日本的ポストモダンのかたち　150　158
第九章　現代文学と仮想環境　限りなく薄れる他者・物との交わり　仮想環境への欲望　168　175
第十章　「狂人日記」を読む　シミュレーション世界の物語　シミュレーション世界での安住　186　196
第十一章　物語消費論批判　現代の常民・少女　現実の〈物語〉への還元　204　211
年譜
あとがき

反市民の文学

対話的批評を求めて

第一章
反市民の文学

オイディプス的状況の排除

坂口安吾の「桜の森の満開の下」は、彼がそのエッセー「文学のふるさと」のなかで論じたシャルル・ペローの童話「赤頭巾」と共通の特徴を持っている。あるいは、「文学のふるさと」で示されている坂口安吾の抽象的なレヴェルでの思考が、「桜の森の満開の下」において具体的な作品として結晶化したという印象を与える。坂口安吾は「赤頭巾」の《むごたらしい美しさ》に深い印象を与えられたとこのエッセーのなかで述べているが、「桜の森の満開の下」もまた、「赤頭巾」と同じく、通常のモラルや人間性などとはまったく関係のない次元で展開されていくファルス的な物語であって、それは「文学のふるさと」の忠実な小説化であると言えるし、ダダイズムが映画によって表現されるものを先取りして表現していたのだという、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ベンヤミンが「複製技術の時代における芸術作品」のなかで示した思考法にしたがうならば、「桜の森の満開の下」があらかじめ「文学のふるさと」によって注釈されてあったと言うこともできるだろう。これは、現代の思考のなかでしだいに重要性を増してきた、現在による過去の規定、結果による原因の決定というプロセスにも従っている。要するに、「文学のふるさと」と「桜の森の満開の下」は、相互に二重化されている関係にある。坂口安吾においては、エッセーと小説作品との相互二重化が時折見出される。この相互二重化、または次元を異なるところにおいた反復表現は、相互に補強し合う関係にあり、エッセーと小説作品とのあいだでいわば対話がつねになされているものと見ることができるだろう。われわれはこうした対話が、エッセーと小説作品という異なったジャンルのあいだだけではなく、坂口安吾の作品全体のなかでいつも継続されているのを感知する。

桜の森は鈴鹿峠に設定されてはいるが、現実の場所・時代はほとんど問題ではなく、それもまたファルスのひとつの特徴である。《花の咲かない頃はよろしいのですが、花の季節になると、旅人はみんな森の花の下で気が変になりました》これが非日常世界の存在の告知だといってしまえばそれまでのことだが、坂口安吾のファ

ルス的諸作品では、非日常的なものがつねに支配的に存在しているから、この部分もかならずしも非日常的世界の存在の告知という意味だけを持つのではない。こういう書き方は童話的であり、それだけでも「赤頭巾」から血をひいた作品であることが感知され、また男に七人の妻がいたという設定、さらに美女が最後には鬼であったことがわかるという設定にも、ペロー的・童話的・伝説的な要素がある。坂口安吾がいうファルスがどういうものであり、それがどのような重要性を持っているかは、本書のなかで徐々に示されるはずであるが、坂口安吾にとっては、こういう種類のファルス的作品こそが、まさに《文学のふるさと》、つまり文学の出発点であると意識されていたのであり、それをエッセー・小説などさまざまなかたちで反復して言語表現化し、それによって対話的な状況を設定しているのである。

男は、森のなかで襲った女を連れて、七人の妻のいる家に戻って来る。《七人の女房は今迄に見かけたこともない女の美しさに打たれましたが、女は七人の女房の汚さに驚きました。》――ひとりの読者が坂口安吾の作品を好きになれるかなれないかは、このような部分に心を動かされるかどうかによってきまるだろう。「桜の森の満開の下」では、登場人物の容貌はただ単に美しいとか醜いとか書かれている

だけであり、それらの人物は類型的であって、個別的特徴を持ってはいない。彼らには名前すらない。（のちに言及する色川武大の『狂人日記』に登場する医師にも名前がないことが想起される。）そして意識的に写実性を拒否するこういう特徴こそ、ファルスの特徴であり、そういう特徴を持った作品を坂口安吾はわが国の近代文学で一般的であった傾向に対立するものとして提示しているのだと私は考える。つまり、《反市民の文学》がここに見えてくる。

「桜の森の満開の下」のなかで、男は女が要求する通りに、七人の妻たちのうち最も醜い女を下女として残しただけであとの六人は殺してしまう。そしてさらに女の要求を認めて都に移り住むが、女が何よりも欲しがるのは人間の首であり、男は殺人を繰り返して首を持ってくる。そして女はそれらの首をならべて《首遊び》にふける。

《彼等の家にはすでに何十の邸宅の首が集められていました。部屋の四方の衝立に仕切られて首は並べられ、ある首はつるされ、男には首の数が多すぎてどれがどれやら分らなくとも、女は一一覚えており、すでに毛がぬけ、肉がくさり、白骨になっても、どこのだれだということをよく覚えていました。……女は毎日首遊びをし

ました。首は家来をつれて散歩にでます。首の家族へ別の首の家族が遊びに来ます。首が恋をします。女の首が男の首をふり、又、男の首が女の首をすてて女の首を泣かせることもありました……。〉

まだしばらく続くこの首遊びの部分は、レーモン・ルーセルの『ロクス・ソルス』に見られる、ガラスの水槽のなかで演説をしているダントンの頭骨のイメージ、『日本霊異記』下巻第一に出てくる、舌だけが腐らずに熊野の山中で法華経を唱えているどくろのイメージなどを想起させる。直接の引用や影響があったと断定することはできないが、現実を超えたイメージがいかなる抵抗もなしに使われている。これは超自然的などという形容ではまったく物足りないファルス的な場面である。

こういうファルスはどこから生まれて来たのか。もちろん、ここに示唆しておいたような先行する諸作品からの影響も考慮すべきであろう。しかし私は坂口安吾のばあいは、やはり同時代の〈市民文学〉の否定という要因が大きな意味を持っていると考える。

坂口安吾は、同時代のわが国の文学に対してきわめて批判的であった。特に「デカダン文学論」では、島崎藤村・横光利一・夏目漱石などが批判の対象とされ、ま

たのちにも言及するように「不良少年とキリスト」では太宰治が徹底的に批判される。太宰治と坂口安吾との差異化はもっと意識的になされなくてはならないはずである。坂口安吾は、太宰治などの文学作品が、あまりにも市民生活、特に家族生活の束縛を肯定し、この束縛のなかでの精神の不自由を何ら解決していないことに対してきびしい批判をすることになる。藤村について坂口安吾は次のように書いている。

《彼は現世に縛られ、通用の倫理に縛られ、現世的に堕落ができなかった。文学の本来の道である自己破壊、通用の倫理に対する反逆は、彼にとっては堕落であった。》

坂口安吾がここで《自己破壊》ということばを用いていることに注意すべきである。なぜなら、いわゆる市民文学は家族の倫理に束縛された自己認識の追求を第一にテーマとするのであり、自己破壊は、そういう自己認識の追求という市民文学のテーマとはまったく反するテーマとなり、そのことによって同時に市民文学の破壊になりうるからである。坂口安吾のこうした作業は、反市民主義・反家族主義として規定できるものであり、フロイトの家族主義に対するドゥルーズ＝ガタリの批判

ともつながるものがある。藤村の文学に見える倫理性は、反市民の文学の立場から見る限り、にせの倫理性であり、このにせの倫理性を支えている家族構造そのものに対する自己批判は藤村には存在しなかった。坂口安吾はそのようなにせの倫理性を〈自己破壊〉によって否定し、そこに彼自身のファルスを創り上げていった。

坂口安吾は夏目漱石についても、特に「こゝろ」に言及しつつ、〈あらゆる知と理を傾けて、こういう家庭の陰鬱さを合理化しようと不思議な努力をした人〉だという評価をしている。つまり、漱石の〈家族主義〉に対する批判がなされているが、それは同時に市民文学に対する批判であると見なくてはならない。「桜の森の満開の下」がそういう市民文学に対立するものとして書かれていることは当然だが、坂口安吾が信長・秀吉・家康、さらに黒田如水といった戦国時代の武将たちをテーマに作品を書いていることもまた、家族中心の市民小説に対する反抗であると解読できるだろう。坂口安吾は日本の〈家庭〉の持つマイナスの側面について繰り返して強調するとともに、そういう考え方を実際の作品形成のプロセスのなかではっきりと示していった。私はこれを、坂口安吾による〈オイディプス的状況の排除〉として理解しておきたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb